

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 梶 茂樹

学位申請者 檜垣まり

論文名 タンザニア、ダルエスサラームにおけるスワヒリ歌謡、ターラブの誕生と変容

本論文は、東アフリカのスワヒリ圏において行われている民衆音楽の一ジャンルであるターラブ(Taarab)についての包括的研究である。著者檜垣氏の主たるフィールドはタンザニア、中でもとりわけ首都都市ダルエスサラームであり、本論文ではこの大都市におけるターラブが詳細される。

ターラブについての研究はすでに存在する。しかし、それらは、ザンジバルやタンガといった、いわゆる伝統的スワヒリ都市におけるものであり、本研究のように、本来、寒村であり、19世紀後半になってザンジバルのオマーン王マジッドによって建設が始まり、その後ドイツ、イギリスの植民都市となり、のちに近代タンザニアの首都として発達するような新興都市のターラブについての本格的な研究は、檜垣氏のものが唯一のものである。

檜垣氏は、本研究で、ダルエスサラーム市におけるターラブの生成と発展、すなわち音楽バンドが結成されてから今日に至るまでの活動状況と、興行形態、歌詞、音楽的特徴、音楽が行われる場の歴史の変容過程などを詳細に跡づける。そして、これまでほとんど注目されることのなかった、ターラブ愛好会の、音楽以外の諸活動に着目する。そのプロセスにおいて明らかになるのは、ターラブの発展がタンザニアという新興国家の誕生と発展、そしてタンザニアにおける国民形成の問題と大きく関わっているということである。この点において、本論文は、ターラブの研究という民族音楽学的研究であると同時に、その枠を超えて、すぐれて都市人類学的研究ともなっている。

本論文は、以下のような構成になっている。

はじめに

- 第1章 「スワヒリ」社会の形成とダルエスサラーム
  - 第2章 スワヒリ音文化の形成
  - 第3章 スワヒリ歌謡の誕生と発展
  - 第4章 植民地期におけるターラブ・クラブの発展と拡大
  - 第5章 社会主義体制下と崩壊後のターラブ・クラブ
  - 第6章 ターラブの場1
  - 第7章 ターラブの場2：ダルエスサラームの結婚式
- 終章

資料：ターラブ歌手ダイマ・アブダラのライフヒストリー

まず、第1章では、本論文の目的について述べたあと、東アフリカのスワヒリ文化の形成を跡づける。そこでは、アフリカ・バンツー文化に対するペルシャ・アラブ文化の影響、そして、インド商人の流入によるインド文化の影響など、ターラブの誕生と発展の基礎となる社会・経済的事情が歴史的コンテキストにおいて説明される。

第2章においては、スワヒリ圏における音文化の形成が詳述される。タンザニアは、アフリカではめずらしく、英語やフランス語などではなくスワヒリ語という現地の言語が国語・公用語になっている国である。国内に100以上あると言われる民族・部族を統合する手段としてスワヒリ語は重要な役割を演じている。そしてターラブ歌謡の歌詞は、もともとは、このスワヒリ詩であり、スワヒリ語の普及がターラブの普及をもたらしたし、逆にまたターラブの普及がスワヒリ語の普及をもたらしたとも言える。また本章では、ターラブ以前の、太鼓やホルンを用いた音楽や、植民地化後のイギリス軍の軍楽隊の音楽を模倣したベニ(beni)と呼ばれる吹奏楽、そして女性がおもに係わった踊りレレママ(lelemama)などについても触れている。これらは、いずれも民族を超えたグループを形成しており、これに加わることは、新興都市ダルエスサラームにおいて都市住民として認知されることでもあった。そして、これらの後に流行したのがターラブである。

第3章では、東アフリカ沿岸部におけるターラブ音楽そのものの誕生と発展を、文献によって跡づける。ターラブ音楽の起源としては、東アフリカという説もあるが、ザンジバルでは、ザンジバル島のオマーン王バラガシュ（在位1870-1888年）がエジプトから導入した音楽がその始まりと言われている。当初は、楽器はアラブ風で、弦楽器のウド、バイオリン、縦笛、タンバリン、太鼓などが用いられた。また当初は宮廷で、アラビア語で歌われていたが、20世紀に入り、瞬く間に民衆に広まりスワヒリ語で歌われるようになる。最初のバンド、ナーディ・アフワン・サファーは1905年に結成されている。また1908年にはナード・シューブが結成される。この2つのバンドの競合が、ターラブがザンジバルのみならず東アフリカ一帯、そして海外でも受け入れられるきっかけを作ったのである。また、奴隷出自の女性歌手シティ・ビンティ・サアドがコロンビア・レコードからスワヒリ語のアルバムを出したことも女性を含めたターラブファンが東アフリカに急増したことに大きく寄与した。ターラブ音楽は、その発展の過程で、地元音楽とアラブ音楽に加えて、インド音楽、ラテン音楽など様々な外来音楽の影響を受けていることが示される。なお、ターラブ楽団は、一種の愛好会を形成しており、たんに演奏者だけでなく、会費を払って集まってくる老人たちを多数擁していた。彼らはクラブ・ハウスに集まり音楽を聴き、同時にゲームに興じたり、商売や生活、宗教、政治について語るのもであった。

第4章では、主たる調査地であるダルエスサラーム市の歴史と、そこでのターラブを含む大衆文化の発展、現状について述べる。1930年代から60年代の植民地期ダルエスサラームのアフリカ人街では、民族ごとの互助組織とともに、サッカーや音楽など趣味を同じくする超民族的社交クラブが多く存在した。これらもまた互助組織として機能した。ターラブ・クラブというのはまさにそうした組織の一種であった。本章では、当時、絶大な人気を誇った男性グループのエジプシャンとアルワタン、そして女性グループのサニアッティル・フツビとグッドラックの活動を跡づけながら、如何にそれぞれの文化を融合させ独自の都市文化を形成していったかが詳述される。こういった社交クラブは、政治的にも大きな意味を持った。たとえば1950年代に独立の機運が盛り上がるが、初代大統領となるニエレレを支えたのは、ターラブ・クラブのエジプシャンとサニアッティル・フツビ、そしてサッカー・クラブのヤンガであった。本論文の特徴の1つは、関

連文献を渉猟するのみならず、数多くの関係者へのインタビューを行ってデータを収集することにあるが、本章ではこの特徴が十分に発揮される。現在、わずかではあるが、まだクラブ結成初期の頃を知るメンバーが残っており、これらのインタビューはタンザニア音楽史上、貴重な資料となっている。

第5章では、1961年のタンガニカの独立、そして1964年のザンジバルとの連合によるタンザニア連合共和国成立後の社会主義体制下でのターラブ・クラブと、社会主義体制崩壊後のターラブ・クラブの変遷について述べる。1940年代から50年代にかけて一世を風靡したエジプシャン、アルワタンなどのターラブ・クラブも1970年代になると頻繁に分裂を起こすようになり、そこから様々なクラブが誕生していく。政府は、社会主義国家建設のための手段として、伝統音楽やサーカスなどとともにターラブについても政府主導の公営バンドを創設するが、経済政策の失敗によって、その活動も不活性化していく。しかし1985年、ニエレレ大統領のあとを継いだムイニ大統領の時代となると、ヨーロッパの影響を受けた新しいスタイルのターラブが商業ベースで流行し始める。そしてこれが現在のプロのターラブ・バンドへと繋がっていく。昔のターラブ・バンドはすべてアマチュア集団であった。この時代は比較的近年であるため、まだ歌詞も記憶されており、檜垣氏の精力的な聞き取りにより、その多くが記録されることとなった。

第6章と7章では、ターラブが演奏され歌われる場の記述である。ターラブ音楽は、バンドの活動拠点であるクラブ・ハウスだけでなく、コンサートホールやバー、結婚式、選挙活動など様々な場で演奏されるが、とりわけ結婚式での演奏が興味深い。ターラブ・バンドが活躍するのは何と言っても結婚式での生演奏の場であるからである。また結婚式での報酬が主な収入源となっているバンドも多い。第7章では、結婚式をアラブ風、スワヒリ風、キリスト教風に分けて、その詳細な段取りが示される。

終章は、以上を総括すると同時に、昔ながらの伝統的ターラブと近年の踊るディスコ風のターラブとが共存している現状、そして広義の“スワヒリ化”によってターラブが、タボラ、ウジジなどタンザニア内陸部へと伝播していったプロセスが示される。

本研究の貢献として、まず第1に、ターラブ音楽そのものの記述が挙げられる。例えば、歌詞については、その内容から、愛、嫉妬、侮辱、結婚式、一夫多妻婚、別離・離婚、死別、教訓、政治などに分類されること、音楽性については、伝統的なスワヒリ叙情詩の流れを汲み、音節数や押韻などの規則性があることなどが示される。そして何よりも、豊富な実例である。これは、先にも述べたように、タンザニア音楽史への貴重な貢献となっている。

同時に本研究は、ターラブの生成、変容過程がスワヒリ社会の政治、経済的变化と深く結びついていることを示した。スワヒリ社会、とりわけ、ダルエスサラームのような新興都市社会は、外部から絶えず様々な人、文化を受け入れながら変容を続ける柔軟な社会を構成している。本論文は、生成、拡大そして変容を続けるスワヒリ社会の特質を、音文化の観点から明らかにしたものとして高く評価できる。

審査委員からの意見としては、以下のようなものがあつた。人類学的研究としては、分析の視点が定かでない。スワヒリ語訳に間違いがある。ターラブのアフリカ化ということをもっと説明すべきである。音楽を行う階層についても説明して欲しい。アスキューなど他の研究者の主張と対比して自分の論点をもっとはっきりと出すべきである。ターラブ・クラブなど、クラブという用語が本研究では重要な意味を持つが、スワヒリ語の *chama* に戻ってもっと説明が欲しい。

以上のようなコメントは、檜垣氏がこれから研究を続けて行く上で重要な示唆を含んでいるが、本論文自体の価値を減じるものではない。よって、本論文は博士（学術）の学位を与えるにふさわしいものであると審査委員全員が一致した。